

# 第20回記念 広島スタディツアー

## 杉並ユネスコ協会青年部

2018・3・25日（日）～28日（水）

～献花、20周年記念式、被爆体験講話、資料館見学、江田島・宮島訪問など～



今年で20回目を迎えた杉並ユネスコ協会（朝倉洋子会長）青年部の「広島スタディツアー」が、3月25日（日）から、3泊4日の日程で行われました。広ユ協は初日25日、広島平和記念資料館東館地下1階会議室で開かれた「スタディツアー・20周年記念式」で歓迎・交流挨拶、杉並ユ協青年部（11名）と地元から参加した広島大学附属高校ユネスコ班（3名）は、一緒に「被爆体験講話」を聞き、平和取り組みへの意見を交換し合いました。



## ☆20周年記念式☆

最初に広ユ協の亀井章会長が、「杉並ユ協の熱心な取り組みに拍手を送ります」と述べるとともに、亡くなる直前のスタディツアーの「語り部講話」に、車いすに乗って立たれた、故高橋昭博・元広島平和記念資料館長（元広ユ協副会長）と同夫人・史絵さんに、そして、記念碑巡りのガイド役を務めて来られたピースボランティアの橘光生さんに、感謝の言葉を贈りました。

次いで杉並ユ協の朝倉紘治相談役（元会長）から御礼の挨拶があった後、同相談役から亀井協会長に「20回目のスタディツアーを迎えるに当たり、貴協会のご支援・ご協力に深く感謝の意を表します」との感謝状が贈呈されました。この後、高橋史絵さんから杉並ユ協の代表に、真心込めて折っていただいた折鶴のレイが渡されました。



## ☆被爆体験講話☆

広ユ協副会長で元広島平和記念資料館長の畑口實さんが話をされました。畑口さんは73年前、母親の胎内にいる時、被爆されました。「母は自宅の廿日市市から、父を探すため勤務先の広島鉄道局管理部へ足を踏み入れ入市被爆」。

講話で畑口さんは、原爆投下に至る米ソを中心にした戦争・敗戦の歴史や、母から聞いた被爆死した父の模様、胎内被爆者であることを長い間隠してきたことなどを語られました。また現在、語り部活動をされている畑口さんは、米国の原爆投下に対して、「憎しみは消えてはいない」と胸の底にある怒りの気持ちを述べられる一方で、「し

かし憎しみをもって、憎しみを消すことはできない。乗り越えるのは『愛』である」と、力を込めて平和実現への叫びを、高校生らに訴えられました。



### ☆意見交換会☆

会合は広島大学附属中・高校の藤原隆範教諭が司会をされました。杉並ユ協青年部のメンバーが「ドイツの戦後教育」「ヒロシマ・スタディツアーを経験して」について研究・感想発表、広島大学附属高校ユネスコ班の代表が「被爆地広島から平和について」意見を述べました。

参加者からは、「被爆・平和を語りつがなければならないと思うが、なかなか実行できていない」、韓国を訪問して「過去の歴史や事実を知ることが大事だが、若者が理解し合うことが大切だと思った」。また、このスタディツアーが20年を重ねてきたことを振り返りながら、「自分たちには未来へバトンを渡す役割があることを認識し、未来からお礼を言われる“過去”（自分）になりたい」などと、現状や課題について感想を述べられました。





意見交換の場で司会役の藤原教諭は、附属高校が 1953 年、世界平和に貢献する学校としてユネスコ協同学校（世界 32 校の内の 1 校）に選ばれ、学内活動を長期にわたって推進してきているが、他校への広がりとなると課題も残ると指摘されました。

なお杉並ユ協の皆さんは、会合の前に原爆死没者慰霊碑に献花、終了後に東館 1、2 階の資料館を見学されました。

